



2021.11 / VOL.28

ボードレス・アートミュージアム
NO-MA ニュースレター



79億の他人

—この星に住む、すべての「わたし」へ
2021年9月18日(土)~11月21日(日)

北野謙、田辺慶大、八幡亜樹、金仁淑、土方泰いと
ヒジカタタミ、五十嵐英之と倉地雅徳、intext、
重症心身障害者通所施設えがお、佐々木卓也、
武田憲昌、藤本正人、みんなの“鑑賞”

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー〜生きることが光になる〜

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、
近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力：社会福祉法人さふらん会、社会福祉法人
創樹会、社会福祉法人びわこ学園、MEM



展示風景
重症心身障害者通所施設えがお



創作活動中の風景

NO-MAとまちや倶楽部の2
会場で開催した「79億の他人」展。
タイトルが示唆するとおり、本展
には、たくさん「他者」がいます。
国籍や文化が違う人、目が見えず
耳も聞こえない人、身体障害や知
的障害のある人、言葉を用いない
人……自分とは違う世界にいるの
ではないか？と思わせるような他
者性の滲む表現のキュレーション
を試みました。ここには自分以外
の存在「他者」を、わがことし
て想像していただきたいという狙
いがあります。この場では、各会場
からアーティストずつ取り上げ
て紹介します。

だつたりします。他者たちの集合
体は、1人の人物かと思まがう像
を浮かび上がらせています。
例えば、わたしがわたしである
ということ、つまりは「自己同一
性」が、家族、学校、職場等々、属
してきたコミュニケーションでま
り通っている言語、慣習、常識などにより、
わたしの外部から受肉されたもの
であつたとしたら？わたしはあら
ゆる他者の集積なのかもしれない
——北野の作品は、唯一的存在で
ある自己をくじき、誰かもわから
ぬような集合的他人へと還してい
くかのようです。

まちや倶楽部では、重症心身障
害者通所施設えがお(以下、えが
お)の創作活動から生まれてきた
作品を展示しました。重症心身障
害者とは、寝たきりで重度の知的
障害がある障害状態の人たちを
指します。えがおの創作活動にお
いては支援者が、利用者らのそれ
ぞれの得意なこと、関心のあるこ
と、または身体可動域などを鑑み、
画材や描画方法を模索しています。
その結果として、絵具を塗った手
で布を掴んだり、Tシャツを着た
支援者に抱きつくなどといった方
法が生まれています。

NO-MA 1階
に展示した北野謙
の《our face》シ
リーズは、一見す
ると、1人の人物
を捉えた肖像写真
ですが、実際には、
数十人の顔が薄く
重なり合うように
して焼き付けられ
たものです。その
数十人は、近江高
校の野球部員だつ
たり、だんじり祭
りに参加する人々
だつたり、中央ア
ジアの小学生たち

創作活動の参加者の中には盲る
う(視覚と聴覚の重複障害)の人も
います。言葉がなく、光や音がなく、

可動域が限られるその人と、いか
に意思疎通を図るのか？そう考え
ると、とても気が遠くなる思いが
します。しかしながら、創作活動に
携わる支援者らのふるまいには、
不安をいなしなやかさがありま
す。身体や表情の微細な変化など
から気持ちを読み取り、また支援
者らもあらゆる方法を駆使して相
手に向けて何らかのメッセージを
発する。言葉はなくても、人間性を
交感できる語彙が、そこにはある
ように見えます。Tシャツや布に
着いた絵具は、絵画的な像を結び
つつ、同時に、言語外の領域で交わ
された会話の痕跡でもあるのです。
このように本展では、「他者性」や
それを超克するコミュニケーション
に着目しました。いかに他者と
感じられるような相手だとしても、
対話するための勇気を、言葉以外
の語彙を、通じ合えるかもしれない
という希望を、与えるような展
覧会になつていたらと願います。

ノマ Topic of NO-MA トピ

はたさんからもらった大切なもの

文：横井悠(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA 主任学芸員)

9月に「ボーダレスの証明
はたよしこという衝動」展が閉
幕した後、はたよしことのお息
女からうれしいお便りが届いた。
作文が同封されていて、そのタ
イトルは、「おばあちゃんから
もらった大切なもの」。中学1年
生になるお子さん(はたよしこと
の孫にあたる)が、展覧会を観て
作文にまとめたのだ。読むとそこ
には、はたさんが取り組んできた
ことを知り、気付きを得たことが
奥深い言葉で綴られていた。し
かも、その作文はお住まいの地
域の作文コンテストで金賞に選
ばれたようだ。うれしかったので
作文のタイトルを本文のタイトル
でも引用させていただいた。

私もまた、はたさんから大切
なことを教わった者の一人だ。
2010年にはたさんと出会い、

一緒に展覧会を作る中で、企画
者としての重要なスタンスを学
ばせていただいた。特に印象深
かったことの一つに、「わからない
ものをわからないまま受け止め
る」がある。これは、1998年に
発行された『風のうまれるところ』(小学館)で既に言及されて
いて、たびたび直接話してくれ
ることもあった。

はたさんは障害のある人の作
品を前にして、むやみに理解し
ようとしたり、あるいは分析し
たりすることはほとんどなかった
と思う。その代わりに、はたさん
が繰り返していたのは、「表現衝
動の力」。人が皆持っている表現
への欲求に対し、どれだけ忠実
かという見極めである。障害の
ある人の表現に真向から向き合
いつつも、それらを解明するの



ではない。表現のエネルギーを
その塊のまま受け止め、展覧会に
落とし込んでいくのだ。割り切れ
ない、曖昧、わからない、そう
した感情はこの世の中にあふれ
かえっている。未消化を受け入れ、
それ自体を楽しむはたさんの一
貫した姿勢は、キュレーションだ
けでなく、日常を生きる上での人
の心のあり様を教えてくれる。

障害のある人の表現活動と出
会い、NO-MAを舞台に提示し
てきた、障害者と健常者、プロと
アマなど、ボーダーを超えてい
こうというはたさんの実践。それ
らを間近で見てきた私にとっては
はたさんは、アートとの向き合い
方を教えてくれ、固定観念の殻を
崩してくれた導き手だった。



「ボーダレスの証明 はたよしこという
衝動」展の様子は、NO-MAのYouTube
チャンネルからご覧いただけます。
<https://youtu.be/2V3ksN0WwyE>



鈴木恵太さんの「展示」と アール・ブリュットの「展示」(後編)

文：横井悠
(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA主任学芸員)

前編が掲載されたVOL.27は
こちらからご覧いただけます。



「展示」に対し意識的でないことが多く、自らが生み出すものを「アート」とも「作品」とも呼ばないことすらあるアール・ブリュットの作者の表現を、美術館という場はどのように受け入れていくのか前号で紹介した鈴木恵太さんの展示は、つねづね議論に挙がるこうした問いに対して新たな視点を示している。今号では、別の例を紹介しながら、引き続きアール・ブリュットの作品展示方法について考えていきたい。

2018年に岩手県花巻市にある、るんびにい美術館で企画展「ルンビニック・アーティストズ! きよしさん さなえさんならこう展示するそうです!」が開かれた。この展示会は、八重樫季良さん(きよしさん)と佐々木早苗さん(さなえさん)というアール・ブリュット関連の展示会でも紹介されることの多い2人が、初めて展示構成を行うという挑戦的な企画である。展示構成を考えるにあたり、企画者はギャラリーのミニチュアを用意し、それを基に、2人と展示構成を検討



「ルンビニック・アーティストズ!」
きよしさん さなえさんならこう展示するそうです!
展示会場(るんびにい美術館, 2018年)



展示を検討する八重樫さんと佐々木さん

したそうだ。完成した展示会場では、展示壁面の上方に絵画作品1点が象徴的に展示され、また、天井から床すれすれまで様々な作者の作品が隙間なく配されるなど、予想外な展示が練り広げられた。作家の意向が存分に反映されたからこそ可能となる展示であり、作家性が会場全体で感じられる展示である。

鈴木さんの展示とるんびにい美術館の展示を比較すると、前者はバランス型といえそうだ。鈴木さんの展示を実現するために担当学芸員は、作者のメッセージを受け止め、かつ深層情報を引き出すように、一方で、展示会のテーマや「展示」を成立させるための要素(作品・場・鑑賞者)の関係性が安定するよう、進行役に徹している。対して、るんびにい美術館の展示からは、作者の意向をできる限り受け入れ、遂行するという姿勢が窺える。作品・場・鑑賞者の関係が多アンバランスになることがあったとしても、それを含めて表現の「ありのまま」と捉え、展示空間に反映している。

学芸員のスタンスに違いはあるが、作者との関係性を重視する両展示は、共通して冒頭の問いに対して示唆が含まれていると思う。そこでは、学芸員が空間にどのようなりズムで配置するかといった、作品展示における方法論を突き詰めるのとは異なり、作者の思いや意識に耳を傾け、かすかな声を聴きとる力が試されることだろう。

無論、学芸員側が展示を一手に担うことは必要である。学芸員が行うことで、表現の独創性が浮かび上がり、それが見る人たちとの交感につながるということは、筆者自身、何度も経験していることだ。しかし、前号で記した通り、作者と学芸員の関係が不均衡な上に成り立つ傾向にあるアール・ブリュットの展示においては、どの作品に對しても一律そのような方法で展示するのではなく、鈴木さんやるんびにい美術館の展示に見られるように、別の角度からの選択肢についても模索する必要があるのではないだろうか。

地域インタビュー ohmi-hachiman local interview

町づくりの新しいカタチを模索して

成安造形大学
未来社会デザイン共創機構
助教 田口真太郎氏

文：赤澤啓四郎(自立生活支援員)



鈍いものになってしまうという。現在、成安造形大学で「Co-Creation」をキーワードに学生と共創に取り組みながら、「官民連携という言葉を少しアップデートしたい」と考えている。大学で学んだ建築が、共創につながっていくという手ごたえもある。

NO-MAと田口さんの出会いは10年ほど前、NO-MAの近所にある古民家で暮らしていた田口さんの家に、展示作家5、6人が2週間ほど住み込んだ。「作家さんとの共同生活は楽しかったですね。NO-MAの取り組みは素敵だし、奇跡のようだし、学生時代から、かっこいいなと思っていました。本質的にいいことをやっていれば、見ている人は必ずいる。これからも力になればと思います」と心強い。近江八幡の魅力を語りだすと止まらなくなるという田口さんの思いは、今もYouTubeにアップされている「動画なRADIO放送局」で見ることができる。



<https://new-normal-art-project.com/broadcast/>

*NO-MAのご近所さんをゲストに招いてインターネット配信したトークプログラムの収録場所として、旧市街の真ん中、旧増田邸にラジオブース風スタジオを開設した。



ラジオブース風スタジオで意見を交わす
田口さんと久木さん(中央)、川村さん(右)

旧増田邸のラジオブース風スタジオ*をのぞくと、やや表情をかたくしながら、レイカ34会の川村嘉男さんと久木茂さんが真剣に町の活性化について語っていた。柔らかい笑顔で場を和ませ、話を引き出していたのがナビゲーター役を務めていた田口さんだ。

「10年前に近江八幡に来て、川村さん、久木さんにはずっとお世話になってきました。大学入学をきっかけに茨城から引っ越して来た僕にとって、滋賀のお父さんのような存在。プライベートまですべて知られているし、僕が大変な時期も支えてくれました」

家族のような存在だからこそ、言葉にしづらいこともある。「まじめに話しかけたら、照れてはぐらかしてしまうような人たちだけど、少しかしこまった雰囲気になかで、整理して意見交換することがで

きました。このトークプログラムすごいですね!」

田口さんは滋賀県立大学で建築を学び、卒業後は近江八幡で町づくりに携わってきた。「近江八幡は大好きな町でいくらでも語る事ができるけど、課題を感じることもあります」。昨年まで町づくり会社の「まっせ」で活動してきたが、会社の休眠を機に直接的な町づくりから離れ、少し距離をおいたところから近江八幡を見ている。

「町づくりってみんな大好きな言葉なんです。でも意味が広すぎて、要求もたくさん出てくる。これまで分野を問わず浅く広く、何にでも足を突っ込んで活動してきました。一度立ち止まった今感じている課題は、行政と民間の間にある隔絶です」

近江八幡に限らず、町づくりは行政への依存が強くなり、地域住民の意識を

あの一の 近江八幡 スタイル

町あるきツアーでガイドする田口さん



NO-MA次回展「第18回滋賀県施設・学校合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～」

《前期》
2021年11月27日^土～12月26日^日

《後期》
2022年1月8日^土～2月6日^日

開催時間:11:00～17:00

休館:月曜(1月10日は開館、翌11日休館)

展示入れ替え(12月27日^日～1月7日^金)

会場:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

観覧料:一般200円(150円)、高大生150円(100円)

中学生以下・障害のある方と付添者1名無料
※()内は20名以上の団体料金

主催:第18回滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会、
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
[社会福祉法人グロー(GLOW)]

後援:滋賀県、滋賀県教育委員会、
近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力:一般社団法人近江八幡観光物産協会、
社会福祉法人しみんふくし滋賀

助成:障害者芸術文化活動支援センター運営費補助金
(滋賀県)

《関連イベント》ギャラリートーク

ギャラリートークはオンライン配信します。
詳細はホームページをご覧ください。

《前期》
2021年11月27日^土 13:30～15:00

《後期》
2022年1月8日^土 13:30～15:00

《関連イベント》常設ワークショップ

前期・後期、それぞれ出展作品の制作を追体験
できるような常設ワークショップを実施します。
詳細はホームページをご覧ください。

日時:会期中いつでも

本展における新型コロナウイルス対応について来場される方には、以下の対応をお願いします。

1. 体調不良(発熱・咳・咽頭痛・味覚障害などの症状)の方はご来場をご遠慮いただきます。
2. マスク着用、こまめな手洗い、アルコール等による手指消毒をお願いします。
3. 観覧中は、他の人と接触しない程度の間隔を確保してください。(障害のある方等の誘導、介助を行う場合は除きます)
4. 来場者が多い場合は、入場を制限させていただくことがあります。
5. 大きな声での会話はご遠慮いただきます。

主催者として、以下の新型コロナウイルス対策を徹底します。

- ・スタッフは毎日、検温・体調確認を行い健康管理に努めます。
- ・スタッフはマスク着用の上で案内いたします。また、こまめな手洗いをを行います。
- ・館内のドア、手すり、トイレなど、手を触れられる箇所の消毒を強化します。
- ・館内は密閉した空間にならないよう、定期的に換気を行います。

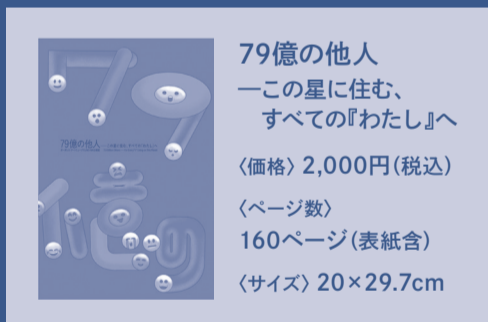
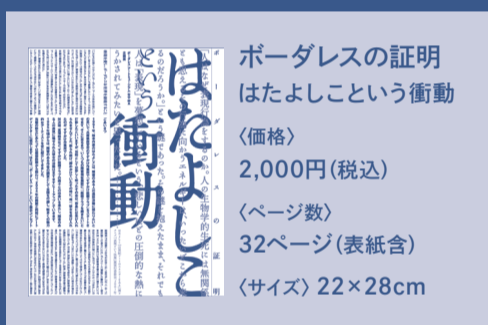
<NO-MAグッズのご案内>

アール・ブリュット作品のメモ帳やトートバッグなど、NO-MAのミュージアムショップやホームページからお買い求めいただけます。



<NO-MA企画展グッズのご案内>

今号にてご紹介した企画展「ボーダレスの証明 はたよしこという衝動」[79億の他人—この星に住む、すべての「わたし」へ]の図録を販売しています。NO-MA、もしくはNO-MAホームページにてお求めください。



<NO-MAの情報発信>

NO-MAでは、ホームページでの情報発信に加えて、SNSを活用した情報発信も行っています。Facebook、Twitter、YouTubeに加えて、今年からInstagramも開設しました。フォロー、お願いします。



NO-MAホームページ
<https://www.no-ma.jp/>



公式Facebook
museumnoma



公式Twitter
museum_noma



公式Instagram
museum_noma



YouTubeチャンネル



NO-MAアーカイブ

編集担当・赤澤誉四郎 【編集後記】

東海道を、東へ東へ。東京を越えて、千葉を越えて、利根川を渡ると茨城県に入ります。本州の東の端っこ。高速道路も行き止まりで、電車もほとんど走ってない。そんな陸の孤島といわれた人口6万人ぐらゐの小さな町に、鹿島アントラーズというサッカークラブができました。もう30年前の話です。アントラーズのファンクラブ広報誌を作っていた前職で、クラブが25周年を迎えた5年前、記念号にこんな文章を書きました。「本州の東の端っこにある小さな町に、25年前小さな灯りがともりました。その灯りが消えないように、たくさんの方が大切に守って、いつしか日本中を照らすような大きな灯りになりました」NO-MAに灯りがともったのは、17年前です。たくさんの方がこの小さな美術館に足を運んでくれています。感動したり驚いたり、日本だけでなく、世界が注目する存在になりました。この灯りを絶やすことなく、たくさんの方が力を尽くして守っています。会場ボランティアの皆さんの活躍を見ると、多くの人に支えられていると実感できます。いつか、近江八幡にサッカークラブが誕生したら、作家さんにエンブレムやユニフォームをデザインしてもらって、誰もが楽しめるバリアフリーのスタジアムを作りたい。「そんなこと、99%無理だよ!」って思いますか?そんなことは、ありません。だって、アントラーズは「99.999%」リーグへ加盟は無理」といわれるほど弱小だった逆境を跳ね返して、奇跡を起こしたクラブでしたから。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



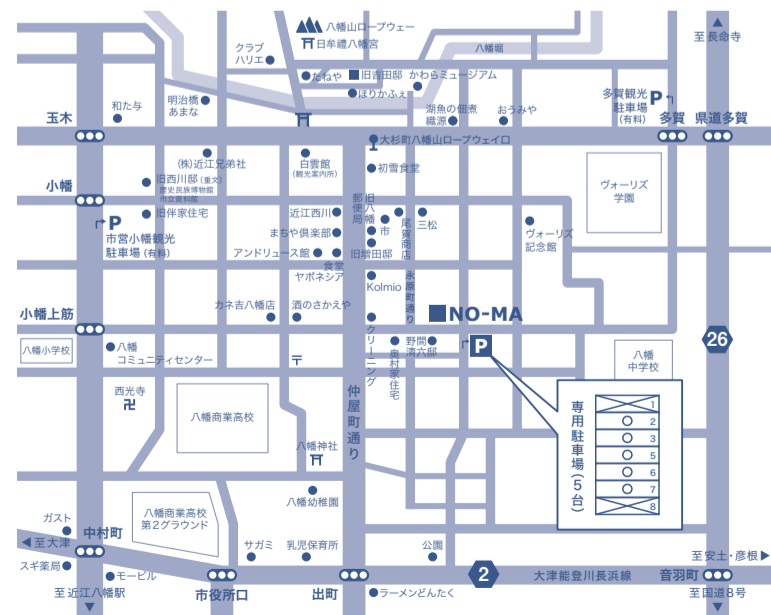
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日:月曜日
(月曜日が祝日の場合は翌平日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
<http://www.no-ma.jp>



Access アクセス



JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町八幡山ロープウェイバス下車徒歩8分。名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分) JR近江八幡駅から徒歩30分、自転車10分。